

フィジーにおける英語使用の地域差

—小学生へのアンケート調査(分析)から—

The Regional Differences of English Use in Fiji
— Results Analysis of a Questionnaire for Elementary School Students —

後藤田 遊 子
大 原 始 子

要約

フィジーにおける英語使用状況について、都市部と農村部(都市周辺と山間)における社会・文化的立場からの現地調査を試みることにより、人々の英語使用に地域差が生じる可能性の確証を得た。そこで、地域差の実態を社会言語学的な立場からより明らかにする目的で、都市の市街地にある小学校、都市周辺の農村地域にある小学校、山間部農村にある小学校の3ヶ所を訪れ、授業の観察をし、小学生に英語使用に関するアンケート調査を行った。小規模調査ではあったものの、居住地域による英語使用の差異が、社会言語学的な分析においても有意差として現れた。これらの社会・文化的、社会言語学的両面から得られた結果が、フィジー社会を理解する上での基礎資料となることを期待する。

はじめに

フィジーでは英国植民地政策の遺産である英語が実質的に公用語の役割を担い、学校教育における教授言語にもなっている。フィジー語による言語統一の声がたびたび上がるにもかかわらず、英語の地位は益々上昇しているというのが現状である。しかし、実際の生活の場面では、英語は都市部において第二言語、農村部(特に遠隔地、離島)では外国語として機能している様子が窺われるのである。本稿では、後藤田が、都市や農村における英語使用を取り巻く状況に関する社会・文化的調査から、英語使用の地域差を探ると同時に、大原が、アンケート調査から社会言語学的に検証を行う。具体的には、英語教育を受けている児童が英語学習と英語使用をどのように受け入れているかについての分析を試みる。さらに、今後、フィジーにおける英語使用がどのような方向に向っていかを予測していく。なお、本稿の1章から3章までを後藤田が執筆し、4章から8章を大原が執筆する。

1. 多言語社会フィジーの概観

南太平洋の十字路に位置する島国フィジー(フィジー諸島共和国)に対して日本人が抱くイメージは概ね「楽園」の島であろう。結婚式とハネムーンをセットにした観光旅行が人気で、日本人

観光客も増えているようだが、美しい海と白い砂浜を満喫する旅行者も、この国の国語や公用語に興味を持つ暇もなく「楽園」を後にしていることだろう。

英国から1970年に独立し、現在、英国連邦の一員であるフィジーは330以上の島々からなり、陸地面積は四国とほぼ同じくらいである。人口は約84.8万人で、54.3%が先住民のフィジー人 (Indigenous Fijian)、38.16%がインド系フィジー人 (Indo-Fijian)、その他が7.5%となっている (2004年)。インド系フィジー人 (以下、インド人) とは、植民地時代にサトウキビ・プランテーションの契約労働者として移住し、契約終了後も本国に戻らずフィジーに留まったインド人たちと彼らの子孫を指す。その他の民族の中には、パート・ヨーロッパ人 (Part European: 白人との混血) とロツマン (Rotuman: フィジーの保護領であるロツマからの移住民)、中国人、太平洋諸島民が含まれる。

言語状況を概略すると、フィジー人の母語であるフィジー語 (方言を含む) とヒンディー語 (フィジー・ヒンディー語を含む)、そして英語を加えた3つが主要言語で、中でも、英語は公的文書、メディア、そして教授言語としてもっとも主要な地位を占めている。英語は公用語の役割を担っているが、現行のフィジー憲法 (1997年制定) には公用語であると書かれていない。憲法第4条 (1項～3項) にフィジーの言語に関する項目がある。1項には、英語、フィジー語、そしてヒンディー語がそれぞれ平等の地位を与えられていること、2項には、憲法は英語で書かれているがフィジー語版やヒンディー語版もあること、3項には、各言語版による解釈の違いが認められるときは英語版の解釈が優先する、と述べられている。フィジー憲法は独立直後の1970年に制定され、1990年と1997年に改正されている。一連の憲法改正は自給自足生活のリズムが染み付いたフィジー人と、移住者であるが商魂たくましく経済的な優位性が目立つインド人との間の政治的・経済的確執が原因とも言われる。1990年憲法には、フィジー人政治指導者の政権維持とフィジー人の優位性を盛り込んだため、人種差別憲法であるとして国際的な批判を免れなかった。1997年憲法では、すべての民族が平等に「フィジー諸島国民」であることが強調され、フィジー語、ヒンディー語、英語が平等に扱われることになったのである。

ヒンディー語が主要言語のひとつであることの背景に、この国が100年余に渡り英国の植民地 (1874年～1970年) であった事実から説明する必要があるだろう。17世紀半ばのオランダ人冒険家タスマンのフィジー島発見に始まり、西洋諸国の太平洋航海が盛んになるにつれ、フィジーはヨーロッパ人の影響により大変貌を遂げた。19世紀中ごろには、文字を持たないフィジー語がイギリス人のキリスト教宣教師によって英語の文字を当てられ、正書法が確立されるとともに、フィジー人にキリスト教への改宗を目的とした識字教育が始められた。有力部族を治めフィジー王となったザコンバウがキリスト教へ改宗することにより国中がキリスト教化し、1874年には英国の植民地となった。20世紀に入ると、植民地政策の一環として、インド人がプランテーションの契約労働者 (1879年～1916年) として移住し始める。契約期間終了以降も本国に戻らずフィジーに定住するインド人が増加し、フィジー人の人口数に拮抗する頃には、英語やフィジー語を交えたピジンから発展して、フィジーのみで通用するインド人たちの話し言葉としてフィジー・ヒンディー語 (Fiji Hindi) が確立された。

フィジー人の母語はフィジー語であるが、フィジー人のみならず、パート・ヨーロッパ人やロ

ツマン、そして、南太平洋地域から移住して来た人々の生活言語でもある。フィジー語の方言は100以上あり、方言差が大きいために通じないことも多い。そのため、バウアン (Bauan) と呼ばれるフィジー語が標準フィジー語に定められている。英語がフィジーに普及し始めたのはそう遠い昔のことではない。植民地時代の初期は主にフィジー人エリートの子どものだけに英語教育が施されていた。1926年の教育条例により教育言語として英語を使用することが制度化されたが、本格的に英語が都市部を中心に普及し始めるのは独立以降とみられる。

こうしたフィジーの言語事情を見ると、英語が母語でなく生活言語でないにも関わらず公用語の役割を担い教育の媒介言語として使用されていることも理解できよう。

2. 都市部と農村部の英語使用状況

フィジーの都市部では英語は第二言語 (second language)、遠隔地や離島では外国語として機能していると言われるが、実際に、英語の使用状況を知るには、①都市部におけるフィジー人とインド人の接点、②内陸部や離島の村の生活スタイル、そして、③フィジー人学校 (Fijian School) と多民族学校 (mixed school) について知る必要がある。以下、これら3点について概略し英語使用の地域差を探りたい。

①都市部におけるフィジー人とインド人の接点

都市化現象はフィジーにおいても顕著で、若者を中心に都市への流出が進んでおり、国民の40%は首都スバ (Suva) のあるビチレブ島の都市部で生活している。スバの人口構成を見ると、フィジー人 (8万5千人)、インド人 (6万5千人)、中国人 (3千人)、ヨーロッパ系 (5千人)、ロツマン (4千人) その他 (5千人) となっている (2003年)。スバは、首都としてのみならず、南太平洋の政治・経済の中心地で、民族の^{るつぽ}垣塙の様子を呈しており、街中の看板から、テレビ番組、新聞に至るまで英語が氾濫している。英字新聞は、フィジー・タイムス (*The Fiji Times*)、フィジー・サン (*The Fiji Sun*)、デイリー・ポスト (*The Daily Post*) の3紙がある。週に一度刊行される新聞に、ヒンディー語1紙とフィジー語2紙があるが、発行部数は英字新聞に到底及ばない。テレビ放送も英語が主流で、時折、フィジー語やヒンディー語の宣伝あるいはニュースが放送される。母語放送はラジオで聴くことができるが、人々がラジオに求めるのは主に音楽番組である。もともと、最近ではインドから配信されるケーブルテレビの普及や映画、ビデオ・DVDなどインド人はヒンディー語で親しむことのできる娯楽が増えている。その一方で、フィジー人にとって娯楽は英語を通して楽しむ割合が高い。

フィジー人とインド人が職場や公の場で接する機会が多いのは都市部である。仕事場や商店で両者が会合するとき、彼らの会話は英語に切り替わる。政府関係の職場も多く、多民族が行き交うスバでは英語の共通語としての役割は重要であろう。しかし、常に英語が他の言語を征してリンガフランカの地位を保っているわけではなく、インド人やフィジー人の高学歴者たちの間ですら母語を中心としたバリエーション豊かな日常会話が交わされているようである。とは言うても、都市で職を得るための第一条件として英語を第二言語並みに運用できる能力が必要であることに違いはないであろう。

②農村部、そして内陸部や離島の村の生活スタイル

フィジー国民の60%は農村部に居住している。インド人の多くは、首都のあるビチレブ島とバヌアレブ島の、植民地時代からサトウキビ・プランテーションで栄えた地域に住んでおり、ビチレブ島の西部から北部の町や周辺の農村に住むインド人の多くは、現在もサトウキビ栽培に従事しフィジーの基幹産業であるサトウキビ産業を支えている。インド人の居住地が点在している農村地域では、両者の共通語は英語というよりむしろ、その地域のフィジー語方言であり、フィジー・ヒンディー語の語彙が混ざりあう。

内陸部や離島にはフィジー人の村落が点在している。内陸部の農村から海岸の都市部への交通事情が改善され、往来が活発になり都市との隔絶感は減少してきた。しかし、内陸部のみならず離島の村では電気や水道の設備が不十分なため、現在でも、前近代的で自給自足的な生活が一部を占めている。子どもたちは村の学校で英語による教育を受けているが、一步学校の外に出ると彼らの生活世界は母語のみのモノ・リンガル (mono-lingual) 社会である。2005年9月に国勢調査が実施されたが、内陸部のフィジー人の村に配布された国勢調査の説明文書を見るとフィジー語で書かれており、公的文書の使用言語が英語であるという原則はここでは通用しないようであった。このように、インド人との交流がほとんど無い離島や遠隔地の農村では日常生活において英語を使用する必然性はなく、日本と同様、英語は外国語と言ってよいだろう。

小学校の約80%は農村部にあり、そのうち約38%は遠隔地や離島にある。都市部に比べて英語運用能力に差があるため、教育熱心な親たちは子どもをその地域の中等学校ではなく、なるべく都市部に近い中等学校に送りたがる。町の親戚の家や学校の寮に寄宿して中等学校に通わせるのである。町の中等学校を卒業した若者が職を得て町で生活し始めると、村と町の二重の社会に属することになる。つまり、英語が第二言語のような様相を呈する都市部の西洋的近代生活と、フィジー語方言が溢れる前近代的な半自給自足的生活を行き来し、状況に応じて英語と母語の両方を使い分けるのである。

③フィジー人学校 (Fijian School) と多民族学校 (mixed school)

学校教育が英語で行われているので、学校内で子どもたちが浴びる英語の量は相当なものである。しかし、フィジー人のみの学校と多民族で構成される (主にフィジー人とインド人) 多民族学校を比べると、はるかに多民族学校の方が、児童・生徒間、児童・生徒と教員間のコミュニケーション言語として英語が実用的に機能している。また、多民族学校の殆どは都市部とその周辺に位置しているため、テレビやラジオなどのメディアを通して、より一層、英語に接する機会が増える。一方、フィジー人学校では児童・生徒間の会話は、全員がフィジー人であるためフィジー語に偏りがちである。教室においてもフィジー語へのコードスイッチングが多民族学校に比べるとより頻繁におきるため、英語使用において、多民族学校で学ぶフィジー人児童・生徒との間に差が生じているのが実情である。しかし、遠隔地・離島のフィジー人学校に比べると都市部や都市周辺のフィジー人学校の児童・生徒は、圧倒的に英語に接する量が多い。学校教育においてはフィジー人学校と多民族学校に英語使用における学校差があるのみならず、前近代的な生活様式が一部を占める遠隔地・離島の農村部と、近代的な都市部との学校差ははるかに大きいことが指摘できよう。

以上3点において、英語使用の地域差を都市部と農村部に焦点を当て探ってみた。フィジー人とインド人が接する地域とそうでない地域では、英語使用頻度に差が生じるのは当然のことであろう。また、人々にとって生活言語は母語であることから、周囲に同民族しか居住していない場合は英語を使用する必然性が生じない。つまり、英語を使用する状況・環境には民族構成による地域差が生じているのである。民族構成による英語使用の地域差は、民族構成による英語使用の学校差の裏づけにもなるであろう。英語使用に地域差や学校差があろうとも、小学校1年生から、あるいは幼稚園から、英語が教育という手段を通してフィジーの隅々まで浸透しているのが実情である。

3. 教育制度と英語を媒介とする教育

3. 1 教育制度

フィジーでは、義務教育制度は確立していないものの国民のほとんどが初等教育を受けており、識字率も高い。公立学校はわずか数校で、コミッティ・スクール (committee school) と呼ばれる小学校や中等学校が主である。コミッティ・スクールとは、政府と地域 (コミュニティ) との協力体制 (state-community partnership) からなる学校組織である。政府の教育施設維持助成金 (grant-in-aid) を受け、町の場合は地域 (コミュニティ)、農村部の場合は児童・生徒たちが通ってくる複数の村々から選出された委員から成る委員会 (committee) が運営の責務を担う。2003年度、小学校の合計は712校で、そのうちコミッティ・スクールが544校、公立小学校が2校、キリスト教系の私立学校が76校、ヒンドゥー教系やイスラム教系の私立学校が84校、そして他の私立学校が6校となっている。学校の運営であるが、公立学校は政府から運営資金が供給されるため、財政的に豊かであり教育水準も高い。コミッティ・スクールは地域や村 (共同体) の有力者が委員になり学校運営にあたるが、共同体がフィジー人の村である場合、高等教育を受けていない長老が名誉職で任に当たるなど問題も多い。また、財政的に苦しい村の学校は教育施設・設備が不十分なのが現状である。

義務教育ではないため、生徒たちは日本のように確立された制度に従って学年を進級するのではなく、年齢的にも柔軟な取り組みができる。初等教育は6歳から始まり、最大で8年間 (クラス1～8) である。表1によるとクラス7、8とフォーム1、2がだぶっている。これは、8学年制の学校を終えると中等学校のフォーム3に進級し、6学年制の学校を終えると中等学校のフォーム1に進級するということである。生徒はクラス (学年) 6を終了後、国内統一進級試験 (Fiji Intermediate Examination) に合格して上の学年に進級する。中等教育は最大で7年間 (フォーム1～7)、生徒はフォーム (学年) 4終了後、国内統一進級試験 (Fiji Junior Certificate Examination) に合格すると、フォーム5に進級することができる。フォーム6終了後の国内統一試験 (Fiji School Leaving Certificate Examination) に合格すると高校卒業となる。フォーム7は大学準備コースと理解するとよいだろう。フォーム7を終了して国内統一試験 (Fiji Seventh Form Examination) に合格すると、高等教育機関に進むことができるという制度である。フィジーの教育はテスト中心主義であり、国内統一試験のあり方に疑問を抱く声もないわけではないが、学校のレベルを知る指標になること、試験結果は進学する学校選択に有用であることで広く

後藤田遊子・大原 始子

受け入れられている (Tavola, 1992:59)。

表1 フィジーの教育年数

年齢 age	就学年数	小学校 クラス	中等学校 フォーム	国内統一進級試験 National examination
6	1	1		
7	2	2		
8	3	3		
9	4	4		
10	5	5		
11	6	6		Fiji Intermediate Examination.
12	7	7	1	
13	8	8	2	Fiji Eighth Year Examination.
14	9		3	
15	10		4	Fiji Junior Certificate Examination.
16	11		5	
17	12		6	Fiji School Leaving Certificate Examination.
18	13		7	Fiji Seventh Form Examination.

高等教育機関の中核は南太平洋大学 (The University of The South Pacific: U S P) である。1968年に設立された南太平洋諸国のための唯一の総合大学で、域内最高水準の高等教育機関である。フィジーの優秀な若者はフィジー人、インド人を問わず南太平洋大学に進学するか、オーストラリアやニュージーランドに留学するかを考えるという。そのためには高度な英語運用能力を身につけておくことが必要となる。

3. 2 英語を媒介とする教育

植民地時代に都市部から農村部に至るまで、4年制のミッションスクールが設立され、フィジー語の標準語であるバウアンで識字教育が行われていた。そのため、母語が廃れることなく現在に至っている。現在でも小学校の3年までは母語が教授言語であるが、フィジー人は標準フィジー語、インド人は標準ヒンディー語で授業が行われるため、両者が入り混じって両言語を学ぶことはない。4年生からは英語が教授言語になり、母語は8年生まで必修科目であるが、それ以降は学ぶチャンスがなくなる。

英語が教授言語となるのは、1926年からである。1926年の教育審議会 (Education Commission) の結果報告によると、小学校3年生までは母語で教育をし、4年生から英語が教授言語に替わるとある。ここに至るいきさつは、①インド人の多くが契約終了後もフィジーに在住し、共通語として英語が必要だったこと、②ニュージーランドの教育支援が開始され、ニュージーランド人教師たちが英語を使用して教育に携わっていたこと、③インド人学校においても様々なインドの地方言語が使用されており言語統一が必要だったこと、などが挙げられている (Mugler, 1996: 277)。1926年に制定された言語政策は、今日もなお有効である。

フィジーの学校教育は、イマージョン式バイリンガル教育と言ってもよいだろう。言語政策上は、小学校3年生まではフィジー語が教授言語で、英語は2年生から科目の一つとして加わる。しかし、現状を見る限り、子どもたちは1年生のときから、韻詩 (rhyme) や歌や数を通して英語に晒されており、3年生になるとすべての授業で英語が使用されている。また、カリキュラムには、異文化理解の時間にフィジー人はヒンディー語会話、インド人はフィジー語会話を学習し、社会科 (Social Study) では互いの伝統文化・習慣を学ぶなど、多文化共生を意識した内容が盛り込まれている。多文化理解教育に加えて、宗教教育・道徳教育もまた強調されている。フィジー人学校では、朝礼／道徳 (Assembly) の時間はキリスト教の礼拝形式で、フィジー語で聖書を読み讃美歌を歌う学校が多い。朝礼が無い日は1時間目の開始と同時に、讃美歌を歌い祈りを捧げてから授業にはいるが、筆者が見学した都市部周辺の農村に位置する小学校のクラスでは、フィジー語でなく英語で行われていた。一方、多民族学校の朝礼の時間は、宗教の違いを意識してディボーション (祈りの時間) や道徳講話を英語で行っている (表2参照)。

植民地時代、学校で英語以外の言語を使用するとペナルティを課すこともあったが、現在、ペナルティの行使は有名無実で、教室における英語から母語への切り替え (コードスイッチング) は教師の判断に任されていると言ってよい。2000年の教育審議会報告には、都市部も含んだ上であるが、児童・生徒たちの英語会話が流暢に見えても、込み入った内容の談話にはついていけない場合が多く、都市部や農村部に限らず、どの学年においても少なからぬ数の児童・生徒に英語の補習授業が必要であることが指摘されている¹⁾。

表2 小学校での学年ごとの一日あたりの授業時間 (単位は分)

科目	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年
朝礼／道徳	20	20	20	20	20	20	20	20
英語	75	75	90	90	90	90	40	40
母語	75	75	60	60	60	60	40	40
算数	40	40	45	45	45	40	40	40
社会	45	45	30	30	30	30	40	40
理科	45	45	45	45	60	60	40	40
異文化理解 (Cross Cultural Program)					40	40	40	40

Curriculum Development Unit, Ministry of Education — Primary School Revised Timetable Analysis 2005 より一部抜粋して作成

4. 英語教育の現状—アンケート調査の実施

4. 1 アンケート調査の対象と目的

フィジーでは、英語が公用語であり、民族間の共通語としての役割もあるため、英語教育の目標は「第二言語としての習得」という位置づけになる。人々はフィジー語もしくはヒンディー語、フィジー・ヒンディーを母語とするが、学校教育での教授言語は、小学校4年生以降英語になることが原則である。そこで、今回、調査対象を、ほぼ100%の就学率があり、中等教育以降の教育を可能にする英語教育が行われる小学校の児童とした。

アンケートでは、英語をそれぞれの母語と関連させ、大きく分けて①英語および英語学習を

どう捉えているか(方向性)、②英語学習への期待、③将来の英語使用、の3つについて探ることを目的とした。これらを引き出すために、アンケートの質問を7項目設定した(付録1参照)。③の将来の英語使用については、フィジー語の言語維持(language maintenance)と言語交替(language shift)をより正確に予測するために、アンケートの調査対象を現在学習中の児童とその両親にしたいと考えたが、今回は両親への調査を断念することになった。児童の両親が英語の理解ができるかどうかという能力の点より、文化的な問題があった。日本人のように、アンケートを生徒が自宅に持ち帰り、親に回答してもらい、それを期日までに学校に持ってくるということが難しいのである。そこで、アンケートの回答者を小学生に絞って小学校で調査を実施し、親の年齢に当たる人にインタビューをして補填する形式をとった。

4. 2 インフォーマント(被験者)の属性—居住地域・民族

2005年9月に3つの小学校で、調査者はインフォーマントに英語で説明をし、英語で書かれたアンケート形式の質問表を用いて調査を実施した。フィジーのビチレブ島は、小さい島でほんの数kmしか離れていないように思えても、都市と農村の生活スタイルとそれがもたらす意識の違い、また農村によって付与された威信が大きく違うという特徴を持つ。そこで、小学生の属性が変項²⁾となるように、居住地域と小学校の民族構成によって調査地を設定した。

4. 2. 1 居住地域

変項となる小学生の居住地域を小学校の所在する場所とし、都市部、都市周辺部、農村部でそれぞれ1校ずつとした。各地域にある小学校は以下ようになる(付録2の地図参照)。

- ① **都市部の小学校**：ビチレブ島西部の都市ナンディ
ナマカ・パブリック・スクール
(Namaka Public School, 以下 NPS)
- ② **都市周辺部の小学校**：ナンディの東約15kmのところに位置する農村
ブンダ・ディストリクト・スクール (Vuda District School, 以下 VDS)
- ③ **農村部の小学校**：ビチレブ島西南 海岸沿いの町シンガトカから約40km内陸の山間部農村
ナマタク・ディストリクト・スクール
(Namataku District School, 以下 NDS)

4. 2. 2 民族

本稿は、小学校における民族による英語学習の達成度の異なりを見るものではなく、学校でどのような教育が行われ、意識が育っているかの地域差をマクロに見ることに重点を置いている。そのため、所属する民族を直接の変項とせず、小学校がフィジー人から成るか、もしくは混合(フィジー人とインド人など)であるかを変項とする。フィジー人の小学校が、農村部のナマタク・ディストリクト・スクール(NDS)とブンダ・ディストリクト・スクール(VDS)であり、そして民族混合の小学校が都市部のナマカ・パブリック・スクール(NPS)である。

4. 2. 3 インフォーマントの構成・年齢・出身民族・性

インフォーマントは小学校ごとに次のような構成になっている。

- ・ナマカ・パブリック・スクール：6年生 27名
〔フィジー人 16：男 6 - 女 10、インド人 7：男 5 - 女 2、その他 4：男 3 - 女 1〕
- ・ブンダ・ディストリクト・スクール：5年生 22名、6年生 24名
〔いずれもフィジー人のみ〕
- ・ナマタク・ディストリクト・スクール：6年生 20名
〔フィジー人 17名：男 9 - 女 8、インド人：男 2 - 女 0、その他：男 1〕

小学校児童は、英語を学校で学習するだけではなく、日常生活の中でも英語を使う場面が多いことに留意しながら、次の項からアンケート調査の回答結果を見ていく。

5. 英語使用に対する意識と英語の威信

アンケートの 1. の質問は、回答結果から英語の運用能力を測るものではなく、「英語がどの程度話せるか」についての内省をしてもらうためのものである。内省の結果から、英語教育や日常の英語使用などがもたらした「英語に対する捉え方」を探るのである。また、1. の質問で、このアンケートが英語に関するものであること、2. 以下の項目に考えながら回答することへの導入をも目的としている。

1. ‘Can you speak English well?’ の質問に対して、次の 3つの回答から選択してもらった。

Yes, quite well, So-so, No, not well

表 3 自分の話す英語についての内省

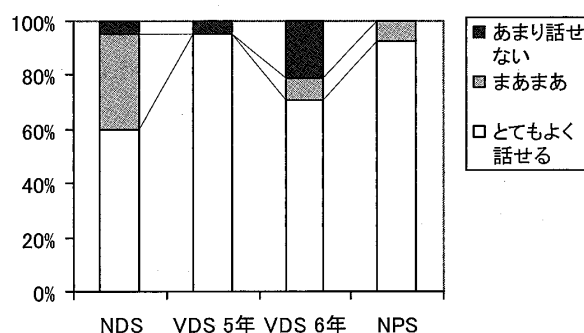
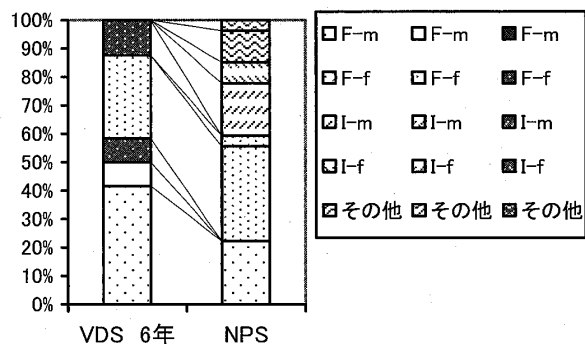


表 4 民族・性による回答の比較



表の項目軸はいずれも左から右へと農村部から都市部になる。まず、表 3 で NDS、VDS、NPS の小学校ごとの回答の結果をみってみる。小学校間の差異の有無は、実数だけでは分かりにくいので、同じサイズで表わしたものである。

表 3 で、「あまり話せない (No, not well)」という回答は、NDS と VDS のみであり、都市部の NPS にはない。これは、英語を使用する場面が NPS では多いことを反映している。一方、「とてもよく話せる (Yes, quite well)」という回答は、VDS (5年生) と NPS に多い。VDS では 6年生になると急に「とてもよく話せる」の回答が減少しているが、5年生と 6年生の回答の差異は、

シラバス、能力などの問題ではなく、5年生の強い英語指向と習得が進むにつれて客観性を得た6年生の回答の違いだといえるだろう。

表を一見したところでは、VDS (6年生) がNDSの児童よりうまく話せないような印象を受ける。しかし、この質問の場合のように、3つの回答の選択肢で、「まあまあ (So-so)」の回答は、解釈の上では「判断が出来ない」「わからない」という評価になる。VDS (6年生) に、「あまり話せない」の回答が多いが、「まあまあ」の回答が少ないことは判断力を持った回答であることを示しているだろう。「まあまあ」の回答が農村部のNDSに多く出たのは特徴的であり、英語が話せるかどうか他と比較する機会が少ないと考えられる。

次に、「あまり話せない」という内省が最も多かったVDS (6年生) とその回答がなかったNPSについて詳しく知るために、回答と属性の関係から検討してみる。

VDS (6年生) とNPSについて、回答者の属性を、フィジー人男児 (F-m)、フィジー人女児 (F-f)、インド人男児 (I-m)、インド人女児 (I-f)、その他、に従って分類したものが表4である。グラフはいずれの民族、性においても、白色が「よく話せる」、グレーが「まあまあ」、黒色が「あまり話せない」を示す。要素は下から、F-m、F-f、I-m、I-f、その他、の順になる。

VDS (6年生) に「あまり話せない」とするフィジー人男児、女児がいるが、NPSのフィジー人男児、女児は、全員「よく話せる」と回答している。つまり、2つの小学校間の数値の違いは、フィジー人の回答の違いであることが分かる。つまり、都市部と都市周辺部のフィジー人の間に、英語に関する意識の大きな違いがあるということである。フィジー人男児と女児を比べると、いずれの小学校においても、女児のほうが英語使用に対して慎重である姿が浮かんでくる。

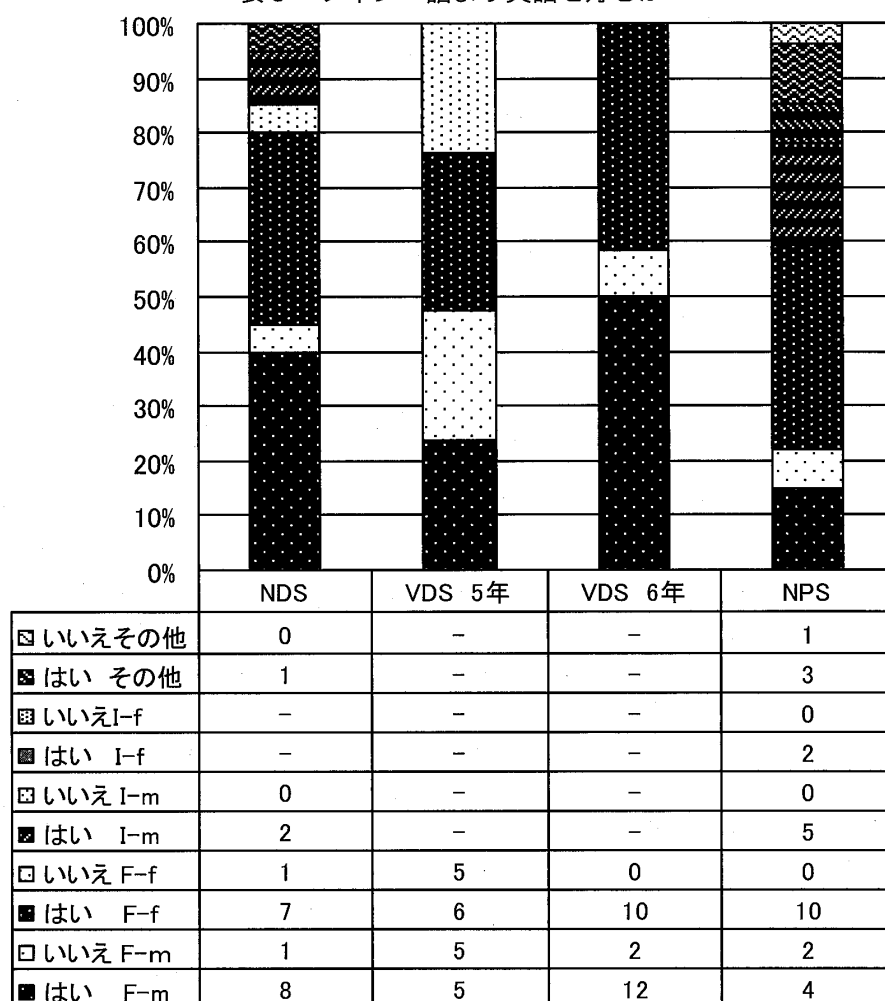
6. 英語とフィジー語に対する指向性

質問2. で‘Do you like Fijian language?’、3. で‘Do you like English?’ と、それぞれフィジー語と英語の好き嫌いを尋ねた。一部のインド人、中国人がフィジー語を好きではないと回答した以外は、全員両言語とも好きであると回答した。「好きですか」と聞いているため、英語もフィジー語も「好き」の回答が多い場合が想定され、「好き」の度合いの違いを知るために、どちらをより好んでいるのかの質問、‘Do you like English better than your (Fijian or Indian) language?’ を付加し、「フィジー語より英語が好きかどうか」回答してもらった。この質問は、いずれの言語により高い威信をおいているかを見るためのものである。回答結果から、言語およびその言語の使用への方向性、将来の言語移行の指標のひとつとして見る事ができる。

表5は、小学校ごとに、各民族の男女別に回答結果を積み上げたグラフである。

フィジーにおける英語使用の地域差

表5 フィジー語より英語を好むか



黒色が「はい」の回答（英語の方が好きであること）を示し、それに対し、白色が「いいえ」の回答（フィジー語の方が好きであること）を表し、グラフの要素は下から、フィジー人男児、女児、インド人男児、女児、その他の順になり、それぞれ「はい」・「いいえ」を積み上げた。一見して、黒色の「はい」の回答が多いことから、民族、男女を超えて、英語の方を好んでいることが分かる。そして、農村部の小学校 NDS より都市に近い VDS の5年生の男女に、フィジー語の方が好きであるという回答が多いことが特徴的である。これは何を示すか後の結果とともに考えてみよう。

7. 家庭内言語－親の言語使用

将来の英語使用の変化を予測するために6. と7. の項目を設けた。児童の意識を探る質問の7. に対応する6. で、現在の家庭内の様子をたずねた。回答には、以下の4つの選択肢を与えた。

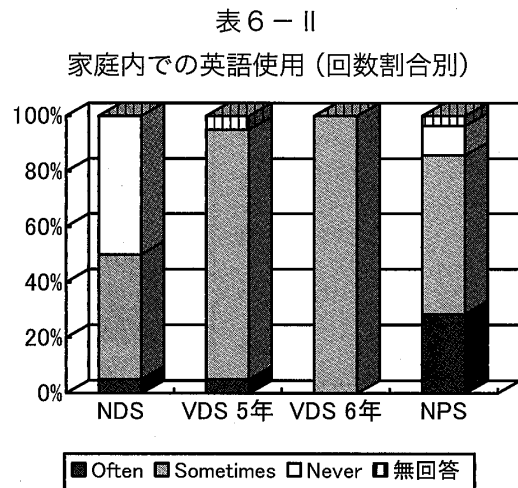
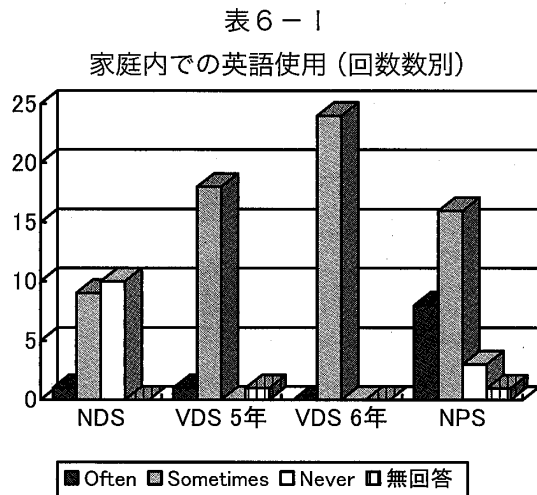
6. Does your father/mother like to talk to you in English?

Often Sometimes Seldom Never

この質問への小学生の回答は、必ずしもそのまま親の英語の使用頻度を表すわけではない。一般に、「あなたのお父さん・お母さんはあなたに英語で話しますか」と直接的な質問された場合には、英語に威信を感じているインフォーマントには、フィルターのかかった回答が出やすい。

質問文に、‘like to’ を用いて、「あなたのお父さん・お母さんはあなたに英語で話しかけるのを好みますか(話そうとしますか)」とすることで、形式的な回答は避けられると考えるので、回答結果から家庭内の様子のある程度把握することができるだろう。

表6-Iで頻度に対する個別回答数の比較をし、表6-IIで小学校ごとの回答割合を提示した。



ここで注目したいことが2つある。表6-Iに見られるように、NDSとNPSでOften, Sometimes, Neverの3つの段階の回答が出た。頻度の違いが意識されていることが分かる。Oftenの回答は、民族混合のNPSに顕著に見られるが、農村部、都市周辺部の小学校には少ない。これは、都市部の生活環境は他の民族と接することが多く、共通語として日常的に英語を使用する機会の多いことが、親の英語使用の頻度に現れていることが分かる。これは想定できることであるが、同時にNPSではNeverの回答も多いことを見逃してはならない。NPSは民族混合の小学校であり、フィジー人とインド人だけではなく、中国人の児童が含まれている。Neverの回答に、中国人児童が含まれており、近年フィジーへの流入が目立つ中国人は日常的に英語を話さないようである。フィジーが都市部の多民族化とそれによる問題を抱えていると想像される。Neverの回答数からみると、中国人の児童を差し引いても、フィジー人の中にあえて英語を使うことを好まないことを選択する人がいることが分かる。一方、農村部では、フィジー人だけで居住しているが、英語使用の拡大があると見ることもできるだろう。

次に、「時々(Sometimes)」という回答の出現である。OftenとSometimesの回答の違いは、主観や回答環境によるので、実際の頻度の詳細な判断材料にはならない。しかし、Neverではなく、Sometimesの回答の選択には、日常的な英語使用の増加への動き、もしくは児童の英語使用に対する指向を見ることができる。表6-IIから、Sometimesの回答の割合が大きいのが、VDSであることが分かる。5、6年生ともに同じ傾向を示している。都市部でも農村部でもない、都市周辺部の小学校で多くを占めるSometimesの回答に、強い志向を読み取ることができる。威信ある言語に向かう力が大きいのは、社会的に2番目のグループであるという社会言語学の普遍的な法則³⁾がある(1972, Labov)。つまり、都市周辺部に住む児童に英語への強い志向が観察

されたことは、都市部での英語使用と英語の威信的使用がすでに高く、かなり意識している証明にもなるだろう。

8. 英語使用の予測—指向性から

質問6. で、自分の両親の英語使用についての質問で、自分と親を取り巻く身近で具体的な状況を振り返って回答してもらい、続いて7. で、自分と子供の間の英語使用を想定してもらう質問をした。回答には、Yes、No、I don't know の3つの選択肢を与えた。

7. Do you hope your son/daughter will talk to you in English, if you are father/mother?

「あなたが親になったら、子供に英語で話してもらいたいのか」という質問は、次世代の子供に英語を使用する十分な能力を期待するか、また自分自身が子供と話せる十分な英語を学習したいか、を問うことになるが、これらに対する回答からは、英語に対する威信のおき方や英語使用に対する肯定的、否定的態度⁴⁾を知ることができる。6. での現在の英語使用に関する回答結果と関連させることで、フィジーの言語社会で将来起こりうるフィジー語から英語への言語移行、またはフィジー語の言語維持の度合いを少なからず予測することができるだろう。

表7-I, II, IIIは、小学校ごとの回答結果を示したものである。回答をそれぞれ、Yesを肯定回答「(子供が) 話すことを望む」、Noを否定回答「話すことを望まない」、I don't knowを不明回答「よく分からない」として回答数を表示した。

表7-I 子供の英語指向：NDS

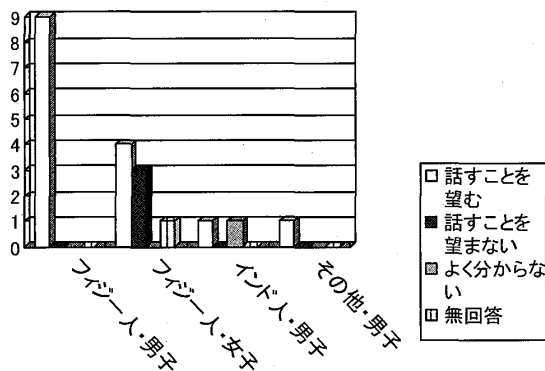


表7-II 子供の英語指向：VDS

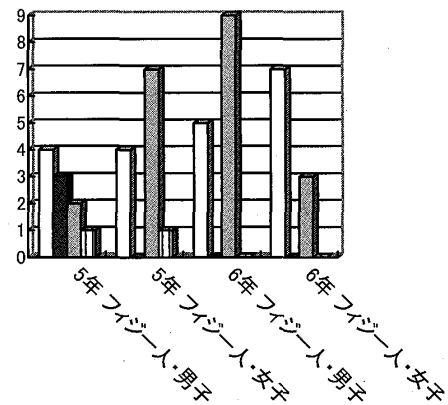
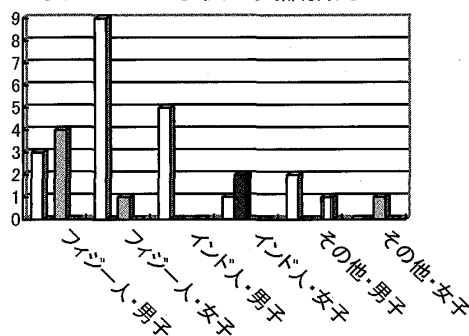


表7-III 子供の英語指向：NPS



3つの表を比べると、農村部の小学校 NDS と都市部の NPS に肯定回答が多く、よく似た形を示していることが分かる。肯定回答は英語に対する指向の指標であるが、NDS と NPS の回答の質は異なると解釈できる。フィジー語から英語への言語の移行と維持を担っているフィジー人の生徒に注目すると、NPS では肯定回答は女兒に多く、男児に否定回答が多いが、NDS はその逆である。一般に社会言語学では、男性よりは女性が威信ある言語や言語特徴に強い傾向を示すといわれる(1978, Macaulay; 1972, Labov)。英語使用の場面が多い都市部の NPS では、それに沿った解釈ができ、女兒が英語使用を率先して受け入れながら、将来フィジー語から英語への言語移行が予測できる。

他方、男性が新しい言語を受け入れ、女性が受け入れない現象は、外部に接触することが少ない閉鎖的な社会、特に言語面で新しい言語と接触が少ない社会に見られる傾向である。NDS の男児に肯定回答が多いのは、英語への好意的関心や社会での必要を感じている結果であろうが、言語の変化を促進する女兒に否定回答が多く、農村部ではフィジー語の一定の維持が予測される。

NDS では肯定回答と否定回答がはっきり分かれるのに比べて、VDS ではあいまいな回答が多いことが特徴的である。VDS の慎重な回答結果は、NDS より英語使用の場面が多いが、フィジー語と英語のどちらを使うか具体的に考える場面に直面して、揺れを示している。NDS も VDS フィジー人の小学校である点では同じであるが、英語使用に関しての意識の形成に、地域差が大きいことがわかる。

9. まとめ

英語使用と地域差に関する仮説を立てて都市部、都市周辺部、農村での調査にのぞんだが、前半で述べたフィジーの居住地域による社会・文化的差異が、英語使用に関する社会言語学的な分析においても有意差となって現れ、実証されたといえるだろう。インフォーマントが小学生であり、政府の方針などに考えが左右されることがほとんどないことと、英語が優位に使用される場面が多くなりはじめた社会が調査地であったことから、英語に対する率直な回答が得られたと考えてよいだろう。

調査結果からは、全体的に都市部と農村部で比較的よく似た傾向の回答結果を示した。これは2つの場所の小学校に通う児童の言語生活が似ていることを示すものではない。結果を男女差を考慮に入れて詳細に検討すると、回答の意味するところの違いが明らかになった。都市部の小学校では女兒が先導する典型で、英語への強い指向が見られ、フィジー人の将来の使用言語は英語がフィジー語に取って代わることが予測される。一方、農村部の小学校では、数値上は強い指向が見て取れ、想像以上に英語が浸透していると考えられるが、男児に見られる英語への指向に対して、女兒にフィジー語指向が強く出ている。これはフィジー語がしばらく維持され、急に英語に取って代わられることはないことを示しているといえる。

最も興味深いデータを提供したのは、都市周辺部の小学校 VDS であった。自分の話す英語がどのレベルか(表3)、フィジー語より英語を好むかどうか(表3)、両親が英語で話すか(表6-I, II)、子供が英語で話すことを望むか(表7-I, II, III)、のいずれにもおいても、農村部や都

市部とは大きく違う結果を出した。表3と表5からは、英語は話せないと思うけれどフィジー語より好きだという結果になり、選択回答の場合、もっともあいまいな回答を常を選択している。これは、言語使用において、現在フィジーで都市周辺部に住む人々が、社会的、言語的に最も大きな揺れの中にあり変化の過程にあることを示している。これからのフィジーの英語使用を含む言語使用の行方は、都市周辺部地域の人々が握っているといってもよいだろう。

小規模調査でありながら、英語使用の地域差という調査前の予測以上にフィジー社会を反映する貴重な結果が得られ、パイロットスタディとしての役目の一部を果たせたのではないかと思う。今後、フィジーにおいては、離島の小学生との比較と、言語使用の変化を探るために、最も動きの激しい都市周辺部の調査を継続していくことで、一層の成果が上がると考える。

本稿は、2005年9月(2週間)と2006年2月(1週間)のフィジー現地調査(後藤田・大原の共同研究)による成果の一部である。調査に協力して下さった3つの小学校の先生方、インフォーマントになってくれた小学生の皆さんに、心よりお礼を申し上げたい。

<注>

- 1) 教育審議会報告とは、参考文献中の *Report of the Fiji Islands Educational Commission/Panel* のことで、引用箇所は296頁。
- 2) 変項とは variable の邦訳で、言語使用や言語変化に影響を与える社会的要因である。
- 3) Labov がニューヨークで4つの階級と母音後の /r/ の有無の関係を5つのスピーチスタイルについて行った調査に見られる、母音の後の /r/ の階層化の調査(1972)などを参考にされたい。
- 4) 態度は language attitudes の邦訳で、その言語が好きか嫌いか、その言語を使いたいと思うかどうかなど、社会言語学では言語使用に関わる概念として使用される。

<参考文献・参考資料>

- Labov, W. *Sociolinguistic Patterns*. University of Pennsylvania Press. 1972.
- Macaulay, R.K.S. "Variation and consistency in Glaswegian English." In Trudgill, P. (ed.), *Sociolinguistic Patterns in British English*. Edward Arnold. 1978
- Ministry of Education *Annual Report 2003*. Parliament of Fiji. 2003
- Mugler, France. "Vernacular Language Teaching in Fiji" In Mugler, and John Lynch (eds.), *Pacific Languages In Education*. The Institute of Pacific Studies, The University of the South Pacific. 1996
- Report of the Fiji Islands Educational Commission/Panel. Learning Together: Direction for Education in the Fiji Island*. Government of Fiji (Ministry of Education) . 2000
- Tavola, Helen. *Secondary Education in Fiji*. University of the South Pacific. 1992

後藤田遊子・大原 始子

付録1

* Choose an answer and write a circle O.

Male・Female

Fijian・Indian・others

Your age _____

Your name _____

1. Can you speak English well?

Yes, quite well

So-so

No, not well

2. Do you like Fijian language?

Yes

So-so

No

other ()

3. Do you like English ?

Yes

So-so

No

other ()

* Do you like English better than your (Fijian or Indian) language?

Yes

No

4. What kind of English skills do you want to study more?

(You can choose some answers)

Speaking

Writing

Reading and understanding

thinking

5. Do you need to study English ?

Yes

No

I don' t know

other ()

* 'No' , 'I don' t know' or other → Go to 6.

* 'Yes' → Go next (5—II).

5—II Why do you need to learn English?

Put a number 1, 2, 3, 4, 5, 6 in each blank.

(1 is the strongest reason... 6 is the weakest one)

{ }・English is a language for Fijian economy.

{ }・English is a language used in the advanced countries (British, America)

{ }・English is a language for communications in Fiji.

{ }・English is a language for communications with other countries.

{ }・English is the World language.

{ }・English is a language to become rich in Fiji.

6. Does your father/mother talk to you in English ?

Often

Sometimes

Seldom

Never

7. Do you hope your son/daughter will talk to you in English, if you are mother/father?

Yes

No

I don' t know

other ()

Thank you for your answering.

付録2 フィジー地図



調査を依頼した小学校の位置

- ① ナマカ・パブリック・スクール (フィジー第3の都市ナンディ市内)
- ② ブンダ・ディストリクト・スクール (ナンディの東約15kmのところに位置する農村)
- ③ ナマタク・ディストリクト・スクール (シンガトカから約40km内陸の山間部の農村)